



## 後藤是山

“生涯一記者”の誇りに生きた後藤是山(本名:祐太郎)は、明治19年(1886)大分県久住町に生まれました。旧制竹田中学から早稲田大学に進みますが家庭の事情により中途退学、明治42年九州日日新聞社に入社します。44年に国民新聞社に記者留学した是山は、社長の徳富蘇峰から直接の指導を受けると共に、徳富蘆花や当時の著名な多くの文化人と出会い、感化を受けました。

熊本に戻り新聞編集を任されたようになった是山は、文芸欄の刷新拡充に努め、東京で出会った著名な俳人、歌人、画家たちを紙面に登場させて、人々の目を見張らせるような紙面をつくりあげます。

昭和9年4月、是山のよき理解者であった山田社長が過労により急逝、九州日日新聞社は再び政治記事重視の紙面になっていきます。政治や政党が苦手であった是山は、折からの社内問題もあって25年間の記者生活に別れを告げ、新聞社を退社しました。

退社後の是山は、「自分は単なる歌人ではない。また単なる俳人でも、単なる郷土史家でもない。ひたすらに俗塵の中に生きつつ世を嘆く老記者、老書生でありたい。」と常々語り、時流におもねず市井に息づく一市民として、郷土の文化の掘り起こしに生涯を貫き、生涯一記者としての生活を全うしました。

昭和61年6月4日逝去。享年99歳。

## 参観案内

開館時間 午前9時30分～午後4時30分

休館日 月曜日・年末年始(12/29～1/3)

入館料 高校生以上200円・小中学生100円

所在地 熊本市中央区水前寺2丁目6-10

TEL096-382-4061

所管 熊本市中央区手取本町1-1

熊本市文化財課

TEL096-328-2740



この記念館の土地・旧居・資料等は、後藤是山の御遺族により寄贈されたものです。

# 後藤是山 記念館



淡成居

## 徳富蘇峰と是山



徳富夫妻と是山

国民新聞社に留学した是山は、社長の徳富蘇峰の薰陶を受けます。是山の資質を見極めた蘇峰は文芸方面の記者として進むように助言、是山の新聞記者としての方向性が定まります。若き日に蘇峰と出会い直接の指導を受けた是山は、終生の師と仰ぐ蘇峰について、「大記者とか歴史家、事業家という呼び名でくくることのできない巨人であった。」と後年述べています。

蘇峰が『淡成居』と名付けた是山旧居では、蘇峰から贈られた公孫樹の樹が今もなお秋には紅葉し、庭園に彩を添えております。



## 郷土史家としての是山

是山は新聞人・文化人として活動する一方、当時あまり手を付けられることのなかった郷土史の分野にも功績を残しています。九州日日新聞に長期連載された「肥後文人画の研究」は単なる文人画史ではなく、熊本と特に関係の深かった文人墨客の人物・業績などを詳しく調査記述したもので、熊本の郷土史家としては初の試みでした。大正2年に宮内省の増田千信が国造の墳墓調査に来熊した際、是山はその案内役をつとめ、連日紙上に関係記事を載せて県民の注意を喚起了しました。これらの記事がひきがねとなって、やがて県下各地の古墳が紹介されるようになり、県の手でその保存・保護が図られるようになりました。『肥後国誌』の編纂、『肥後の勤王』の刊行などは是山が手がけた仕事は今日高く評価されています。



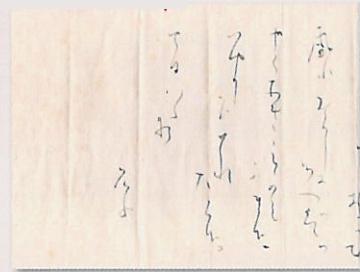
記念館玄関

## 与謝野鉄幹・晶子夫妻と是山

旧制竹田中学時代から歌を詠み万朝報(選者は晶子)への投稿を続けていた是山は、国民新聞社への記者留学を契機に与謝野晶子と出会い、短歌の師弟関係に留まらない深い交流を重ねていきます。

熊本に戻った是山は、文芸欄の短歌の選者に晶子を登場させ紙面の刷新を図りました。

与謝野夫妻は是山と共に、多くの歌を詠みながら、阿蘇、久住、天草などを旅していますが、その時読んだ歌をはじめ、色紙や短冊が数多く当記念館に収蔵されています。



是山あての晶子からの書簡



与謝野夫妻と是山



与謝野夫妻からの年賀状

## 堅山南風と是山



堅山南風

新聞記者と画家の違いはありましたか、同世代を生きた者として終生の友情を育んだふたり、是山は熊本出身の堅山南風を世に送り出すための助力を惜しみませんでした。画家として成功を認め、日光東照宮の「鳴龍」を復元、文化勲章を受章した南風でしたが、片時もその温情を忘ることは無く、是山主宰

の俳句誌『東火』の表紙を長年無償で書き続けました。



「東火」表紙絵

新聞記者と画家の違いはありましたか、同世代を生きた者として終生の友情を育んだふたり、是山は熊本出身の堅山南風を世に送り出すための助力を惜しみませんでした。画家として成功を認め、日光東照宮の「鳴龍」を復元、文化勲章を受章した南風でしたが、片時もその温情を忘ることは無く、是山主宰

「是山」という雅号は、新聞社に入社して半年ほどたったとき、「新聞人は雅号をもたねば人の交わりができぬ」と言われてつけたもので、仏典『碧巌録』の中の「山は是れ山、水は是れ水」という一文に基づいています。若い頃、九州日日新聞の署名入りの記事を読んだ他社の記者達は、その文章と雅号から老成した大人を想像していましたが、本人に会ってその若さに驚いたそうです。

雅号の由来